



TITLE:

辞書と材料 一平安時代辞書論考 一(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

大槻, 信

CITATION:

大槻, 信. 辞書と材料 一平安時代辞書論考一. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12903>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	大槻 信
論文題目	辞書と材料 ——平安時代辞書論考——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文では、平安時代成立の辞書を中心に、辞書と材料との関係について考える。主として取り上げるのは平安時代の三大辞書、新撰字鏡、和名類聚抄、類聚名義抄である。</p> <p>本論文の構成は次の通りである。第一章では平安時代辞書の概観を示した上で問題点の指摘を行う。それを導入として、以下、辞書の成立年代順に、第二章では新撰字鏡を、第三章では和名類聚抄を、第四章・第五章では類聚名義抄（図書寮本）を取り上げる。第五章には第二・三章の要約も含まれており、一連の考察をまとめるものとなっている。第六章には本論文で取り上げた平安時代辞書の解題を収める。</p> <p>序章「はじめに」では、「古辞書を使うということ」という前言の後に、本論文の目的、概要、要旨を示す。</p> <p>第一章「平安時代の辞書についての覚書」は、もと「日本語の最前線」という雑誌特集に寄せた展望的な論文であり、辞書研究の意味と面白さ、現状と見通しについて述べている。これまでの辞書研究の問題点と今後の方向性を示した概説である。辞書研究の方法として、事実を指摘するだけでなく、現象の意味を考えることの重要性を強調している。本論文の中では、導入・概論としての役割りを期待して第一章に置いた。続く第二～五章の執筆意図にも触れるところがある。</p> <p>第二章「古辞書と和訓 ——新撰字鏡<臨時雜要字>——」は新撰字鏡を扱う。新撰字鏡は、基本的に部首分類体の単字辞書であるが、その基本的特徴に合致しない、不統一な部分を含みもつ。意義分類体・熟字掲出となっている部分があり、そのような部分に和訓が集中的に見られる。基本的特徴から外れる部分の存在は、用いられた材料の違いに還元できよう。すなわち、和訓を含み持つ材料を活用することが不統一をまねいたと考えられる。</p> <p>新撰字鏡において、基本的特徴（単字掲出・部首分類体・漢文注主体）をみたす部分は、主として、一切経音義・玉篇・切韻など中国製の材料によって構成されている。一方、熟字掲出・意義分類体を取り、注文が和訓中心となっている部分は、日本製の本草書と漢語抄類とを材料としている。本草書は、書物の性格上、意義分類体であり、熟字による掲出も多かったと考えられる。また、漢語抄類は、日本語を漢字で表記するための実用的な対訳語彙集であり、ことばの単位としては日本語を基準にしている。熟字掲出項目も多い。日本語による音引きが発達していない時代に、日本語から漢字表記を導き出すためには、意義分類体をとっていたであろう。本草書や漢語抄類に含まれる和訓を活用しようとすれば、新撰字鏡の中に異質な要素をまねき込まざるをえない。</p> <p>平安朝期の辞書・類書等に特徴的に見られる、典拠に基づいて記述を行おうとする態度を「本文主義」と呼ぶ。しかし、古辞書の中には、典拠を持つ記述を集成しながら、出典を明記しないものも多い。したがって、古辞書における本文主義とは、典拠が「何であるか（を示すこと）」よりも、典拠を「持つかどうか」の方がはるかに重要であったと考えた方がよい。掲出字や注文を、典拠を持つ記述によって構成しようとする態度は古辞書に共通して見られる。そして、典拠を求めて記述を作り上げるかぎり、典拠たる材料の側に寄りかかった編纂方法しかとれない。つまり、辞書の</p>			

あり方が材料によって規定される。先に見た基本的特徴から外れる部分の特徴（熟字掲出・意義分類体・和訓注主体）は、材料である本草書・漢語抄類の特徴と一致している。材料に依拠した編纂が、不統一の原因の一つであったと考えられる。

新撰字鏡では、和訓によってつなぎとめられた熟字が、辞書全体の構成を乱していた。それは、日本語と中国語とでは、語としての最小単位が必ずしも一致しないためである。日本語では、和訓が漆喰となって、熟字が一つの単位となるという現象が起こりえた。和訓によってつなぎとめられた文字連結は、単字掲出を基本とする新撰字鏡において、破格な存在とならざるをえない。

結局、新撰字鏡という漢漢辞書において、和訓注は、日本語—中国語という質的な面でも、また、和訓を掲載する材料の形態的特徴からも、異質な存在であり、和訓を収集すること自体が原理的に不統一をまねくものであった。

第三章「和名類聚抄の和訓 ——和訓のない項目——」は和名類聚抄を扱う。和名類聚抄は「和名」を「類聚」しているはずであるのに、和訓を欠く項目がある。「梅檀」のように音読されたであろう語彙はおくとしても、「日月風人子目口毛身」等の非常に一般的・基礎的な語に対して、和訓が示されないことがある。容易に与えることができそうな和訓をなぜ注文に加えないのだろうか。

従来、漠然と、和名類聚抄の和訓の中には、編者・源順によって加えられた和訓があると考えられてきた。しかし、本文主義に基づく類書編纂物である和名類聚抄において、和訓だけが何の根拠もなく記入されているとは考えにくい。実際に和訓を調査してみると、順によって追補されたと見える和訓の中にも典拠を持つものがある。

このことから敷衍して推定すれば、和名類聚抄の和訓は基本として全て根拠を持つ和訓であったと考えられる。素材はみな材料からとり、それらを組み合わせ、価値付けすることが編者順の仕事であった。

とすれば、和名類聚抄に和訓を持たない項目があるのは、和名類聚抄が材料とした漢語抄類の中に、その語に対する和訓が示されていなかったからだ、と考えられる。これら基礎的な語は、和訓を付して意味を説明することが適さない語彙であったため、材料である漢語抄類においても和訓が示されていなかったと推定される。つまり、和訓のない項目については、和訓を付すこともできたが省略したのではなく、材料を欠いたため、和訓を付すことができなかった、と理解すべきである。

第四章「図書寮本類聚名義抄片仮名和訓の出典標示法」は図書寮本類聚名義抄を扱う。数ある古辞書のなかでも、訓読語の一大集成とみられる『類聚名義抄』は卓越した位置をしめ、原撰本系の図書寮本は出典が明示されていることに大きな価値が認められている。しかしながら、図書寮本の出典研究は、これまで主として、原典との比較対照が可能な漢文注部分を中心に行われてきており、和訓の出典研究は資料的な制約から部分的なものにとどまっていた。片仮名和訓についていえば、その出典についてさえ厳密に特定できていない。資料的な制約を打破するためには、図書寮本の出典標示方式を図書寮本の標示形態そのものから解明する必要がある。

図書寮本の片仮名和訓には二通りの出典標示方式がある。「アカツ選」のように、和訓の末尾に小さく右寄りに出典名を標示する形式と、「行円云タトヒ」のように「（出典名）云（和訓）」の形をとるものとである。前者を「末尾型」、後者を「云型」と名付ける。

「云型」出典標示が後にかかることは、漢文注部分と共通であり、ほぼ自明である。一方、「末尾型」出典標示が前にかかることは、以下のようにして証明される。まず、出典無標示和訓は「末尾型」片仮名和訓の末尾に偏って現れる。末尾に位置するものが無出典和訓であり、それ以外のは全て出典に帰属させることができると考えられる。次に、標示される出典名には一定の序列がある。「易—書—詩・記・論

・選一月一後一律・列・礼・集一白・遊・唱一切」のようである。一定の秩序に従って配列されている和訓の中に、わざわざ出典を持たない和訓を混入することは考えづらい。以上から、「云型」出典標示は後にかかり、「末尾型」出典標示は前にかかると考えられる。

片仮名和訓は、基本的に、出典序列に従い、出典ごとにまとめて配置されており、「末尾型」出典標示和訓の後に、無出典和訓が配置されているのである。辞書は情報が追加されてゆく本質を持つ。和訓についても、編纂の過程で増補していくことが前提としてあった。増補が可能な形で和訓の出典は標示されなければならない。無出典和訓が末尾に来ることを前提とすれば、「末尾型」出典標示は前にかからねばならない。

「末尾型」の出典標示方式は、一連の記述であることを明示するにはあまり適さないが、前にかかることによって、次々と和訓を書き足していくのに都合がよく、また、出典を明示しない和訓を末尾に加えることができる。一方、「云型」の出典標示方式は、一連の記述を引用するのに適しているが、そのため、末尾に無出典和訓を加えることができない。

出典を標示するという同一の機能を果たすために、「云型」「末尾型」という両型が並存し、「云型」は後に、「末尾型」は前にかかる。一見不統一・不規則に見えるこの標示方法も、出典標示の混乱を避けるという意味で、合理的かつ一貫性を持つものであった。

第五章「辞書と材料 ―和訓の収集―」は、図書寮本類聚名義抄に見られる、注が和訓のみの項目を中心に扱いながら、古代辞書全般に、材料への依存が見られることを指摘し、その依存が古辞書に不統一をもたらしていることを示す。そして、平安時代の古辞書では、特に「和訓」において不統一が現われやすかった理由を説明する。

図書寮本類聚名義抄において、和訓は補助的な存在であり、和訓の収集そのことが第一の目的ではなかった。しかし、その従属的な位置付けにも関わらず、図書寮本には、漢文注がなく、注文が和訓のみである項目が見られる。

片仮名和訓の出典はその大部分が訓点本である。「標出語 漢文注・和訓」という辞書の記述をそのままに受け取れば、漢字Aという標出語に対して、まず、諸書からA字に関わる漢文注が集められ、次に、A字の和訓が諸訓点本よりとられたように見える。しかし、少なくとも和訓に関しては、そのような形で収集することは不可能だ。訓点本の本文の中で、語は予測不可能な位置に現れる。また、ある語を求めたところで、存在しないことも多い。あらかじめ標出語を想定して、ある語・ある文字に対する和訓を訓点本から見つけだしてくるといった作業は考えにくい。まとまった分量の記述（この場合、和訓）を採取する予定の書物に対しては、それを前から見ていき、和訓を抜き出していく方式がもっとも効率的だ。あらかじめAという標出語を想定し、Aに対する和訓を求めて、諸本をひもとくのではなく、標出語とはある程度無関係に、諸点本から種々の和訓を抜き書きしておき、結果、その中にAに対する和訓も含まれていた、という方式で和訓を集めるしかない。つまり、ある漢語の和訓をもとめて、点本をひもとくのではなく、標出語とはある程度無関係に、点本に現れる和訓を順次書き抜いていくほかないのである。

したがって、これら「和訓のみの項目」は、材料によってもたらされたある種の余剰と考えることができる。和訓採録作業が訓点本という材料を主体に行われたため、片仮名和訓のみの注を持つ項目が少なからず存在するものと考えられる。辞書をゼロから生み出すことは出来ない。したがって、辞書が材料に依存することは、常識的に考えられることである。材料への依存は古辞書の表面にも現れている。新撰字鏡・和名類聚抄では、その序文において、材料について語られ、和名類聚抄・

図書寮本類聚名義抄では出典注記という形で材料が明記されている。これらによって材料への依存は明らかである。しかし、ここで問題なのは、辞書が材料に依存しているとはどういうことか、何を意味し、何を結果するかということだ。

新撰字鏡では、部首分類体・単字辞書という辞書全体の基本的性格に背く、意義分類体・熟字掲出部分が見られた。この現象は、和訓を掲載した材料の使用に起因すると考えられる。「和名」を類聚しているはずの和名類聚抄に、和訓を欠く条項が見られた。これは、材料である漢語抄類にその和訓が存在しなかったためであろう。図書寮本類聚名義抄では、漢文注を持たず、和訓のみの条項が見られた。それは、訓点本という材料から和訓を抜き出すことに伴って生じた現象と考えられる。

以上、いずれも、辞書が材料に依存することによって生じた現象として理解できる。これら三つの辞書においては、とりわけ、和訓を収集することによって不統一がもたらされている。それは、これらの古辞書にあって、和訓を収集することが、新たな、そして、それ故に意味のある試みであり、旧来の材料によって和訓注を形成することが困難であったことを示していよう。

材料は完成品に影を落とす。何かを作り上げるには、材料を使わねばならず、その様にして使われた材料は、完成品に対して、何らかの形で作用する。辞書は、様々な材料を素材として活用しながら、ある意味で、材料に従属しているのだ。材料が辞書のあり方を制約し、限界づける。取り上げた古辞書について言えば、材料によって、辞書の基本的属性に変更が加えられ（新撰字鏡）、辞書がみたすべき記述に欠落が生じ（和名類聚抄）、また逆に、辞書の記述に余剰が生じている（図書寮本類聚名義抄）。

そのような不整合が、平安時代の古辞書では、和訓において特に表れやすかったことには理由がある。これらの辞書においては、和訓を盛り込むことが新機軸であったのだ。新たな試みにこそほころびは現れやすい。結局、その時点で、十分に和訓を集成した既存の辞書がなければこそ、これらの辞書は編まれる必要があった。条件に合致した材料が乏しい中、和訓を収集しようとするれば、そこにいくらかの無理・無駄・ムラが生じることは不思議ではない。

第六章「平安時代辞書解題」は本論文で取り上げた平安時代辞書三種（新撰字鏡・和名類聚抄・類聚名義抄）の解題である。

(論文審査の結果の要旨)

平安時代には、新撰字鏡・和名類聚抄・類聚名義抄の三つの大きな辞書が編纂されている。それらの古辞書の記述や和訓から、平安時代に使用されていた中国辞書やそれに対する当時の評価、そしてどのような知的水準であったかを推定することができ、平安時代の言語生活、言語の実態を究明するときには貴重な情報を提供する。しかし辞書の研究は羅列された大量の項目とその説明文を分析する必要があるために、きわめて労力を必要とし、かつ相互に関連の無い、無味乾燥な説明文が続くために、はなはだ忍耐を必要とする分野である。本論文は辞書の項目全体を対象とし、それぞれの辞書の基本的な性格を明らかにしようとした意欲的な論文である。

これまでの研究は、書誌的・記述的な調査から、系統論的な観点の研究が進められてきた。一言でいえば、辞書の系譜作りが中心の傾向が顕著であった。その中で、様々な事実が指摘されてきているが、事実の指摘に終始し、その事実がはたしてどのような意味を持つかについては十分に究明してこなかった。

たとえば、類聚名義抄については、資料としてよく利用されているが、名義抄とはどのような辞書なのか、掲載されている和訓はどんな性格のものか、そもそも和訓を収集するとはどういうことなのか、こういった点について十分な考察がなされなかった。第一章では、そのような従来の研究に対する反省と批判を論じ、辞書に表れた現象の意味を考えることで辞書の本質に接近していくという、新しい研究方法を提示する。

第二章では新撰字鏡が取り上げられる。九世紀成立の新撰字鏡は漢和辞書の嚆矢とされ、基本的に部首分類体の単字辞書であるが、その原則に合致しない部分がある。そういう箇所は意義分類体形式で、かつ熟字掲出となっている。そのうえ和訓が集中する。これは編纂資料の中核であった中国製辞書・音義とは異なった資料をもとにしているために生じた現象であることを論じ、従来の研究が、編集の杜撰さの現れと解釈することの不徹底さを改めている。

第三章では和名類聚抄を扱っている。和名類聚抄は和名を類聚するという名称からも分かる通り、漢字に対して和訓を付することが要で、実際に、和訓を中心に編纂されているが、和訓を欠く項目がある。特に「日月風人子目口毛身」等の基礎的な漢字に和訓が示されないことを指摘し、その原因をさぐっている。これまで編者である源順によって加えられた和訓とみられていた「今案」と書かれたものにさえ、典拠を持つ訓があり、和訓の根拠が見つけれないときにも注記を加えている。このような態度から見て、和名類聚抄の和訓は全てが根拠を持つ和訓であり、和訓が無いのは元の資料に無かったのであろうと論じる。たしかにこれらの文字は他の漢字の注に使われていること、他の辞書でも訓が付けられていないところからみて、和訓が付けられていなかったと推定するのは合理的である。ただし順が加えたものが皆無とは限らないという点は留保しておくべきであろう。

第四章では、図書寮本類聚名義抄の出典表記法を分析している。片仮名和訓の出典の表示方法には出典名を「行円云」とする場合と片仮名訓の右下に小文字で、「コロホヒ<論>」のように「論語」であることを示す場合とがある。この訓の末尾に小文字で出典を記す方式は、一つの典拠から一連の訓を抜き出して、最後の訓に付する形式であること、後に訓を附加していても出典注記が混乱しないので、増補に便利な方式であることを明らかにしている。これまでは注意もされなかった編纂の工夫であったことが分かった。

第五章は図書寮本類聚名義抄に見られる「注が和訓のみの項目」を中心に扱い、具体的な訓の収集方法を明らかにし、古代辞書全般がその材料の制約を強く受けていること、そのために辞書の体例に不統一を来すこと、特に「和訓」に係わる部分

について不統一が現われやすかった理由をあざやかに解明している。「古辞書はそのあり方の根本的なレベルにおいて材料による制約を受ける」と主張するこの章は、本論文全体をまとめる研究となっており、従来個別の現象と考えられて来た、さまざまな辞書に見られる不統一を、材料という観点で一般的に説明してみせたもので、古代辞書の基本的な理解を進めた。

以上のように、本論文は従来の研究に対する批判の上に立った独創性の高い研究であり、具体的な事実に基づきながら、合理的で一般性の高い説明を与えようとする姿勢から、古辞書にとどまらない射程を獲得している。

ただし、本論文では論の運びを明瞭にしようとするあまり、重要な内容を注に回していたり、説明を省略した現象も少なくないようで、論が直線的で分かりやすいのであるが、ふくらみに欠ける部分がある。博士論文としてまとめるにあたっては、重要な言及をしている注を本文に繰り込むなどして、より広い展開につながり得る記述に改めておくべきであったであろう。その点を今後の著者に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年1月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。